

月報だより

月報だよりの原稿は毎月20日に締切り、翌月に発行の「天文月報」に掲載いたします。ご投稿いただいた記事は、翌月初旬に一度校正をお願いいたします。

記事の投稿は、e-mailで toukou@geppou.asj.or.jp 宛にお送りください。折り返し、受領の連絡をいたします。

研究会・集案案内

『理科年表』創刊 100 周年記念講演会のご案内

国立天文台にて編纂する自然科学のデータブック『理科年表』は、おかげさまで、1925年2月20日の創刊から100年の節目を数えることとなりました。毎年更新を繰り返すごとに、新たな発見や過去の知見の訂正を刻み込んで成長してきた『理科年表』は、まさに科学のクロニクル（年代記）ということができます。

本講演会では、そんな『理科年表』各分野の歩んだ道のりから、研究の最前線、今後の展望などを概観していきます。会場ロビーでは、『理科年表』の歴史を振り返る展示や、同じくアニバーサリーイヤーを迎える関連分野の展示なども、お楽しみいただけます。『理科年表』をご愛読の皆さんはもちろん、『理科年表』を知らないという皆さんも、ぜひ会場にお越しください。

本講演会はYouTube国立天文台チャンネルでのライブ配信・アーカイブ配信を予定しています。当日のご来場が難しい方も、配信にてお楽しみください。

詳しくは、「理科年表オフィシャルサイト」にてご案内していますので、ご覧ください。

【開催概要】

タイトル：『理科年表』創刊100周年記念講演会
—科学のクロニクル 百年の歩み—

日時：2025年12月14日(日) 13:00-16:30
(開場 12:00)

会場：一橋大学一橋講堂（東京都千代田区一ツ橋 2-1-2 学術総合センター内）

アクセス：神保町（東京メトロ 半蔵門線、都営三田線、都営新宿線）、竹橋（東京メトロ 東西線）
<https://www.hit-u.ac.jp/hall/accessjp.html>

定員：480名

参加費：無料

参加方法：ご来場いただく場合は事前のお申し込みが必要です。ライブ配信やアーカイブ配信を

ご覧いただく場合にはお申し込みは不要です。詳細は「理科年表オフィシャルサイト」をご覧ください。

詳細：理科年表オフィシャルサイト内

<https://official.rikanenpyo.jp/posts/9170>

主催：理科年表編集委員会、丸善出版株式会社、自然科学研究機構 国立天文台

【内容（途中休憩あり）】

1. 基調講演

・梶田隆章（東京大学 卓越教授／2015年ノーベル物理学賞受賞）

科学の楽しさ～若い時の経験と理科年表～

2. 講演

・渡部潤一（自然科学研究機構 国立天文台 上席教授）

理科年表に見る天文学100年の歩み

・野村竜一（気象庁長官）

気象業務150周年の歩み

・倉本直樹（産業技術総合研究所 計量標準総合センター 首席研究員）

130年ぶりに新しくなった「キログラム」：科学の進歩がもたらす単位の進化

・瀬織一起（東京大学 名誉教授）

地震学の発展と理科年表地学部

・沖大幹（東京大学 総長特別参与／大学院工学系研究科 教授）

理科年表の縦横無尽で水と気候変動研究

お問い合わせ：rika@prcm1.mtk.nao.ac.jp

会務案内

日本天文学会 2025 秋季年会報告

2025年秋季年会は、9月9日(火) から11日(木)までの3日間、海峡メッセ下関および下関市生涯学習プラザ（山口県下関市、ホスト・後援：山口大学・周南公立大学）にて開催された。遠隔地から参加していたるように、現地およびオンライン（ベストエフォート）のハイブリッド開催であった。講演は現地

で行っていただくことを原則としたが、子育てや介護など特別の理由がある場合はオンライン講演も受け付けた。年会参加者数は、会員1,068名、非会員96名の計1,164名（うち現地参加者は935名）であった。講演件数は、口頭講演（a）が598件、ポスター講演（b, c）が162件の計760件であった。2件の企画セッションと、天文教育フォーラム、特別セッション（天文学

白書）、および受賞記念講演も開催された。開催地である山口大学・周南公立大学および参加者の皆様のご理解とご協力により、有効な年会とすることができた。参加者・関係者の皆様にこの場を借りてお礼申し上げたい。座長は次頁の方々に務めていただいた。会場・時間帯別にお名前を示し、感謝の意を表する（敬称略）。

	9月9日		9月10日		9月11日	
	10:30-12:40	14:00-16:10	9:30-11:40	13:00-15:10	9:30-11:40	13:00-15:10
A	広視野赤外 宮武広直 (名古屋大学)	広視野赤外 小山佑世 (国立天文台)	銀河 道山知成 (周南公立大学)	活動銀河核 米原厚憲 (京都産業大学)	活動銀河核 川勝望 (呉工業高等専門学校)	活動銀河核 小麦真也 (工学院大学)
B	惑星系 増田賢人 (大阪大学)	惑星系/星間現象 吉田二美 (産業医科大学)	星間現象 榎谷玲依 (国立天文台)	星間現象 田中周太 (青山学院大学)	星間現象 水野恒史 (広島大学)	星間現象 田中邦彦 (慶応大学)
C	星形成 泉奈都子 (国立天文台)	星形成 大屋瑠子 (京都大学)	星形成 塚越崇 (足利大学)	星形成 工藤哲洋 (長崎大学)	星形成 阪本成一 (国立天文台)	
D	観測機器 岩井一正 (名古屋大学)	観測機器 赤堀卓也 (国立天文台)	観測機器 松尾宏 (国立天文台)	原始惑星系円盤 山口正行 (九州大学)	原始惑星系円盤 芝池諭人 (鹿児島大学)	原始惑星系円盤 野津翔太 (東京大学)
E	恒星・恒星進化 鳴沢真也 (兵庫県立大学)	恒星・恒星進化 行方宏介 (京都大学)	恒星・恒星進化 政田洋平 (福岡大学)	恒星・恒星進化 赤穂龍一郎 (早稲田大学)	恒星・恒星進化 加藤ちなみ (東京大学)	恒星・恒星進化 梅田秀之 (東京大学)
F	教育・広報・他 幅良統 (愛知教育大学)	教育・広報・他 縣秀彦 (国立天文台)	太陽 渡邊恭子 (防衛大学校)	太陽 久保勇樹 (情報通信研究機構)	太陽 勝田哲 (埼玉大学)	太陽 鈴木建 (東京大学)
G	銀河団 松下恭子 (東京理科大学)	宇宙論 石山智明 (千葉大学)	宇宙論 奥村哲平 (中央研究院)	宇宙論 浜名崇 (国立天文台)	微分可能天文学 高田昌広 (東京大学 Kavli IPMU)	微分可能天文学 和泉究 (宇宙航空研究開発機構)
H	銀河形成・進化 萩本将都 (名古屋大学)	銀河形成・進化 津久井崇史 (東北大学)	銀河形成・進化 泉拓磨 (国立天文台)	銀河形成・進化 豊内大輔 (大阪大学)	銀河形成・進化 安藤誠 (国立天文台)	銀河形成・進化 田村陽一 (名古屋大学)
I	コンパクト天体 大城勇憲 (理化学研究所)	コンパクト天体 藤澤幸太郎 (東京工科大学)	コンパクト天体 山岡和貴 (名古屋大学)	コンパクト天体 川島朋尚 (一関工業高等専門学校)	コンパクト天体 朝比奈雄太 (駒澤大学)	コンパクト天体 松本達矢 (東京大学)
J	観測機器 内田裕之 (京都大学)	観測機器 小高裕和 (大阪大学)	観測機器 鶴剛 (京都大学)	観測機器 松本浩典 (大阪大学)	観測機器 沼澤正樹 (東京都立大学)	
K	観測機器 阿久津智忠 (国立天文台)	観測機器 村上尚史 (アストロバイオロジーセンター)	観測機器 永田伸一 (京都大学)	観測機器 佐野圭 (九州工業大学)	観測機器 宮田隆志 (東京大学)	観測機器 塩谷圭吾 (宇宙航空研究開発機構)

〈記者会見〉

日本天文学会2025年秋季年会記者会見は、9月8日（月）13:00からオンラインにて開催された。冒頭、深川副会長による挨拶、日本天文学会の組織・活動概要の説明、及び、本秋季年会の紹介が行われた。それに続き、深川副会長の司会・進行により、学術発表1件が行われた。当日は報道機関から10名、それ以外の関係者4名の参加があった。一部のメディアや大学・研究機関のホームページ等で紹介が行われたことを確認している。

学術発表その1

すばる×ジェイムズ・ウェッブ〜最強タッグが暴く、塵のベールに隠された初期宇宙の巨大ブラックホール〜
松岡良樹（愛媛大学）

（深川美里）

〈企画セッション〉

「微分可能天文学で楽しむ天文学研究」

世話人：河原創（宇宙研）、大里健（千葉大学）、増田賢人（大阪大学）、和泉究（宇宙研）、高田昌広（カブリIPMU）

天文学は本来、最も牧歌的で楽しい学問のはずである。同好の士の単純な集まりとしての企画セッションがたまにはあっても良いのではないかと、ある日思いついた。そこで微分仲間に声をかけ、水面下で盛り上がっていると感じていた微分可能プログラミングの天文学応用をテーマにしたセッションを企画した。微分可能プログラミングとは、プログラムをend-to-endで自動的に微分可能にするプログラミングのことである。これにより現代的なベイズ推定手法や最適化が利用可能になり、高精度データに対する複雑なモデルの推定や自由度の高い装置設計の最適化などに威力を発揮する。世話人の中には十分、講演数が集まらないのではという不安の声もしたが、ふたを開けてみれば、一人12分の講演時間を9分に縮小しないと入らないくらいの応募があった。当日は、最大で50人近い参加者がおり、立ち見がでる盛況であった。

全口頭講演のうち1/3が海外勢という国際的なセッションであり、系外惑星・宇宙論・位置天文・重力波・恒星・装置最適化と実に様々な領域から発表があった。基調講演ではYin Li氏のダイナミクスをラグランジュ未定乗数法にいて微分可能とした流体シミュレーション、Benjamin Pope氏のフィッシャー行列そのものを最適化することによる装置設計といった、微分可能天文学の最先端の話題を聞くことができた。一般講演も非常にレベルが高くて刺激的であった。全体的にはJAXとこれを利用したHMC-NUTSを用いたベイズ推定での応用が多く、天文学における推定問題に対して微分可能プログラミングが強力であることを再確認した。後半の議論では、微分可能プログラミング自体は、物理・化学に基づくモデリングに親和性が高く、伝統的な天文学的アプローチに接続するものとして受け入れやすいが、一方で、これまた微分可能プログラミングであるニューラルネットなどのブラックボックス的なsurrogate modelといつ切り替えるべきか？という機械学習を天文学に取り入れる上での重要な観点が提示された。というわけで楽しい企画セッションになったと思う。皆様、ありがとうございました。

「地上・宇宙望遠鏡の連携による近赤外線広視野深宇宙探査時代における我が国の戦略」

世話人：小山佑世、宮武広直、守屋亮、鈴木大介、吉田道利

昨今のすばる望遠鏡の活躍に代表されるように、日本は可視光の広視野宇宙探査で世界をリードしてきた。しかし可視光の探査には限界があることも、また事実である。観測波長の壁が赤方偏移の壁となり、遠

方宇宙の探索は大きく制限されてしまう。また、塵に埋もれた領域や天体の混み入った領域の探査には、赤外線波長での広視野・高感度・高解像度の観測が欠かせない。そこで「赤外線での広視野観測」をキーワードに、すばる望遠鏡の将来と、それを取り巻く地上・宇宙望遠鏡の状況を整理し、我が国のコミュニティの方向性を分野を超えて議論することを目的として、本セッションを企画した。

本企画セッションでは、2件の基調講演を設定した。東北大学の兒玉忠恭氏には「地上からの次世代広視野近赤外探査が描き出す新しい銀河宇宙像」のタイトルで、またJAXA宇宙科学研究所の山田亨氏には「スペースからの次世代広視野近赤外探査と多波長連携が描き出す新しい宇宙像」のタイトルで、それぞれ我が国が関わる地上・宇宙望遠鏡の過去・現在・未来をレビューしていただいた。本企画セッションは4時間のセッションで、上記の基調講演2件に加え、一般講演として30件の講演が行われた（うちa講演が16件、b講演が14件）。特に、2023年に打上げられた欧州ESAのEuclid宇宙望遠鏡、まもなく打上げ予定の米国NASAのRoman宇宙望遠鏡、すばる望遠鏡の次世代広視野補償光学システムULTIMATE、東京大学が建設を進めるTAO6.5 m望遠鏡（チリ）の観測装置SWIMS、大阪大学のPRIME望遠鏡（南アフリカ）の各計画と、それらに関連する科学成果についての講演が目立った。そしてこれらに続き、我が国の深く関わる計画として、JASMINE、GREX-PLUS、PRIMAなど、いずれも近赤外線の広視野観測を軸とする将来計画も紹介された。我が国の研究者は上に挙げたすべての望遠鏡・装置群にアクセスをもち、可視光での探査に続いて、赤外線での広視野観測天文学をリードできるという期待感が高まる一方で、そのためには国内外の地上・宇宙望遠鏡を戦略的に組み合わせることが必要であり、これまで以上にコミュニティ全体での綿密な連携と戦略策定が必要であることを実感する貴重な機会になった。

なおセッションの会場は、大きなホールをパーティションのみで区切り、複数のセッションが同時進行している形式であったため、各セッションの発表や質問の音が干渉し、スムーズな進行ができなかったことは大変残念であった。しかし幸い、セッション自体は大変盛況で、時間帯によっては立ち見が出るほどの盛り上がりであった。

本セッションの世話人グループは、日本学術振興会の研究拠点形成事業として支援を受け、「地上・宇宙望遠鏡の連携による近赤外線広視野深宇宙探査時代の国際研究拠点形成（2021-2025年度、通称SUPER-

IRNET)」を組織して、これまで約5年間にわたり、光赤外分野の地上・宇宙望遠鏡に携わる研究者を結びつける活動を推進してきた。事業の最終年度となる2025年度の年会で、事業の集大成として企画セッションの機会をいただけたことは大変感慨深く、世話人一同心より感謝申し上げたい。

〈特別セッション〉

「みんなで天文学の未来を語ろう!第3回」

世話人: 天文学白書委員会第1期委員

赤堀卓也 (国立天文台), 石川遼子 (国立天文台), 岡本桜子 (国立天文台), 鴈野重之 (九州産業大学), 河原創 (JAXA/宇宙科学研究所), 高橋慶太郎 (熊本大学・委員長), 田中雅臣 (東北大学), 富田賢吾 (東北大学), 野田浩司 (千葉大学), 野田博文 (東北大学), 米徳大輔 (金沢大学)

年会最終日の9月11日(木) 15:30-16:30に天文学白書に関する特別セッションがハイブリッド形式で開催されました。第3回目となる今回は、前回に引き続き天文学の社会的側面にスポットを当てました。参加者の人数は現地在約30名、オンラインが約30名と多くの方に参加していただきました。

本セッションではまず委員の赤堀から天文学白書委員会の趣旨が改めて説明されました。この事業は日本天文学会員が波長横断・分野横断で天文学全体について楽しく語り合う場を作って天文学コミュニティを盛り上げていくこと、そしてコミュニティの夢を白書としてまとめることを主な目的としています。詳しくは天文月報2025年2月号の記事をご参照ください。また、9月9日に[tennet:2795]にて白書の執筆者が募集され、10月6日に締め切られました。

今回の特別セッションは時間が短かったため、基調講演は国立天文台の平松正顕氏による『「天文学と社会」の今とこれから』の1件でした。平松氏はこれまで国立天文台にて広報、周波数資源保護、産業連携など幅広い分野で天文学と社会をつなぐ役割を果たしてきました。その豊富な経験を踏まえ、天文学と社会の関わりについて国内外の現状がまとめられ、今後天文学と社会が共に発展していくためにはどのような活動・心構えが必要なのか、展望が語られました。また、今年平松氏らを中心として立ち上げられた「天文学と社会」連絡会の紹介もありました。そして講演後には会場も含めて天文学と社会の活動や問題意識に関する議論が行われました。

〈天文教育フォーラム〉

会期初日の9月9日の18時から19時30分まで、日本天文教育普及研究会との共催にて天文教育フォーラムが開催された。今回は海峡メッセ下関の国際会議場(天文学会1会場)とオンラインとのハイブリッド開催であり、対面とオンライン合わせて約110名の方にご参加いただいた。今回の教育フォーラムのテーマは、「天文コミュニティは学習指導要領とどう向き合うか」であった。

学習指導要領は、学校教育法等に基づく、小中高校でのカリキュラムを編成する際の基準である。全国で地域の隔たりなく一定水準の教育を受けられるようにするため、小中高校それぞれに対し、教科等の目標や大まかな教育内容が定められている。学習指導要領は約10年ごとにその時々状況を踏まえて改訂される。天文分野の学習内容についても規定されており、小中高校での天文教育を考えると、何を重視し何を習得してもらうことが望ましいかを考えるうえで、学習指導要領の内容およびその根底にある教育観は、次世代の研究者育成の基盤となるとともに、広く天文コミュニティを支える社会の構成員を育成するという観点においても重要である。2025年現在、次の改訂に向けた検討と議論が進められており、このタイミングで天文コミュニティにおいて情報を共有し、多角的な視点から議論することが次の改訂に向けて意義深い。そこで今回の天文教育フォーラムでは、招待講演者より、日本の教育の指針となっている学習指導要領に関して、様々な角度から話題提供をいただき、学習指導要領における天文分野の課題が何であるのかについて、コミュニティ内で共有および議論するために今回のテーマが設定された。

今回は伊藤信成氏(三重大学)、後藤顕一氏(東洋大学)、岡村定矩氏(東京大学)の3名よりご登壇いただいた。伊藤氏からはそもそも学習指導要領とは何かについての天文コミュニティへの基礎的な知識提供、後藤氏からは化学分野における学術コミュニティからの寄与、岡村氏からは中学校教科書作成における学習指導要領との関係についてと、それぞれ特徴ある話題提供となった。その後のパネルディスカッションでは大朝由美子氏(埼玉大学)を加え、会場全体との質疑応答を交えながら、過去の天文学会における取り組みについての振り返りや、天文分野の特色や他分野との相違点、コミュニティとして学習指導要領にどのように対峙すべきかといった議論が行なわれた。

特に、天文学者は学習指導要領を意識する機会が不足しており、改訂のタイミングでもなかなかその位置づけを理解することは少ないが、基礎的な認識や知識を共有した上で、天文学のどのような内容を教育として提供するか、そしてそもそもその背景にある「なぜ天文を学ぶのか」について、本フォーラムの参加者や天文コミュニティが考えるきっかけになれば幸いである。

〈欧文研究報告論文賞受賞記念講演〉

年会初日の9月9日の17時より、2024年度の欧文研究報告論文賞の受賞記念講演が行われた。講演者および講演タイトルは以下の通りである。
平野照幸氏「近赤外線域での精密視線速度測定」
北木孝明氏「The origins and impact of outflow from super-Eddington flow」

講演会は庶務理事の司会進行のもと、会長の挨拶で開会した。両名の研究とも多くの聴衆にとって興味のあるものであり、熱意のある講演に一同大いに刺激を受け、質疑応答も活発に行なわれた。

〈保育室〉

下関生涯プラザ3階・和室1・2にて、保育室を開設した。本年会では4家族4名が保育室を利用した。保育室の準備にあたり、山口大学・周南公立大学スタッフの方々に様々なご協力をいただいたことを感謝する。

〈公開講演会〉

日本天文学会第75回公開講演会は、2025年9月13日(土) 13:30から16:00まで、山口大学と周南公立大学の後援を得て、下関市生涯学習プラザ(大ホール)で開催された。講演会タイトルは「未知の宇宙を探索する ～惑星探索とブラックホール～」であり、杉田精司氏(東京大学教授)による「小惑星探査機「はやぶさ2」が明かした太陽系の初期進化」と、本間希樹氏(国立天文台教授)による「電波望遠鏡で見る 未知の天体ブラックホール」の2講演が行われた。200名の聴衆が参加し、各講演後に活発な質疑が行われた。高校生以下の参加者が全体のおよそ20%を占め、アンケートでも「大学に進学する意味を見つけた」

れた」といった感想があり、市民にとって有意義なものとなったことがうかがわれた。司会は藤沢健太(山口大学)が務めた。

(藤沢健太)

〈懇親会〉

年会2日目の9月10日(水)、下関グランドホテル大宴会場「飛翔」にて懇親会が開催された。会場の都合により参加者数を制限する必要があったが、事前申込(先着順)により204名(うち学生78名)が参加した。キャンセル待ちにご登録いただいた40名の皆様にはご参加いただけず、心苦しく感じている。

懇親会の受付業務には、2025年秋季年会と同様にオンライン決済サービス「イベントペイ」を導入し、円滑な運営を実現した。学会会場と懇親会会場の間は、大型バス2台による送迎で快適に移動していただいた。

懇親会は、新沼浩太郎・山口大学開催地理事の進行により19時に開会。山神明・山口大学理学部長の挨拶、続いて太田耕司・天文学会長の挨拶および乾杯の発声で宴が始まった。唐戸市場直送のお造り盛り合わせや下関名物の瓦そばなど豪華な料理がテーブルを彩り、特に山口県内の酒造から取り寄せた12種類(各一升)の地酒を揃えたコーナーは大盛況で、すべての酒瓶が空になるほどであった。山口県産のトマトジュース等のソフトドリンクも大変好評であった。

余興としては、地元で活躍するプロJAZZバンド「平家ボーイズ」による約60分の生演奏が披露され、最後にはアンコールが出るほどの盛り上がりを見せた。さらに、次回開催地である京都産業大学からのメッセージが代読で紹介され、続いて藤沢健太・山口大学教授の挨拶をもって散会となった。

料理や演奏を楽しむだけでなく、参加者同士の交流も活発に行われ、学術交流の場であると同時に、世代や立場を超えて親睦を深める貴重なひとときとなった。

(道山知成・新沼浩太郎)

(年会実行委員長 和泉究)

編集委員会より

天文月報記事投稿用アップローダー

https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/author_submission/

■ログイン

ユーザー名: geppou パスワード: toukou

■アップロードの仕方

アップロード画面で必要事項を埋めてください。するとアップロードに進むことができます。できる限りファイルは1つにまとめてください。ファイルが複数ある場合は「複数のファイルを投稿する」ボタンを押してください。押すたびに欄が増えます。1回あたり全部で最大50 Mbyteまで、個数は20個まで送信できます。それ以上の巨大なファイルのアップロードは推奨されませんが、やむをえない場合は分割してお送りください。

■注意

投稿者の個人の認証はcookieを利用しています。したがってcookieを受け取らないブラウザでは使えません。

またフォームのチェックや可変個数のアップロードボックスはjavascriptを利用していますのでjavascriptが使えなければこのアップローダーは使えません。

その場合はtoukou@geppou.asj.or.jpまでメールでご投稿ください。

■連絡先

アップローダーに関するご質問はtoukou@geppou.asj.or.jpまでお願いします。

(天文月報編集長)

天文月報記事ご執筆用テンプレート

SKYLIGHT, EUREKA, 天球儀などのご執筆にあたりましては、日本天文学会HP内「天文月報」のページにあります「投稿用テンプレート」をご活用ください。

https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/author_template/

TeX・LaTeXで執筆される方はテンプレートをオンライン上またはダウンロードしてご利用ください。MSWordで執筆される方はwordテンプレートをダウンロードしてご利用ください。また、ご執筆の前に必ず「執筆マニュアル」をご一読ください。

https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/author_manual/texをご利用される場合は、あわせてreadmeもお読み下さい。

また、ご利用にあたって不具合を発見された方は、編集委員会までご連絡をお願い申し上げます

天文月報 119巻1月号 主な掲載予定記事

SKYLIGHT: 近傍宇宙における分子雲形成の研究最前線【徳田一起, 小林将人, 安部大晟】

天球儀: <2024年度日本天文学会天文教育普及賞> すべての人に星空を 一緒に生きる社会を目指して【高橋真理子, 跡部浩一】<2024年度日本天文学会天文遺産> 天文遺産紹介 一臨時緯度観測所本館(現・木村榮記念館)【本間希樹】<2024年度日本天文学会天文功労賞> 太陽黒点観測【望月悦育】

<シリーズ> アカデミアの外を知る: 「高専教員座談会—高専教員の仕事について知ろう!」実施報告【佐藤大仁】

<シリーズ> 天文学者たちの昭和: 日江井榮二郎氏ロングインタビュー [第10回] 東京天文台の改組【高橋慶太郎】

編集委員: 日下部展彦(編集長), 岡本文典, 小山翔子, 志達めぐみ, 鈴木大介, 高橋葵, 田中壱, 谷川衝, 鳥海森, 中島亜紗美, 信川久実子, 橋本拓也, 福島肇, 藤澤幸太郎, 宮武広直, 宮本祐介, 守屋堯

令和7年11月20日 発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

印刷発行 印刷所 〒162-0801 新宿区山吹町332-6 株式会社 国際文献社

定価733円(本体667円) 発行所 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

Tel: 0422-31-1359(事務所)/0422-31-5488(月報) Fax: 0422-31-5487

振込口座: 郵便振替口座00160-1-13595 日本天文学会

三菱UFJ銀行 三鷹支店(普) 4434400 公益社団法人 日本天文学会

日本天文学会のウェブサイト <https://www.asj.or.jp/> 月報編集 e-mail: toukou@geppou.asj.or.jp

会費には天文月報購読料が含まれます。

©公益社団法人日本天文学会 2025年(本誌掲載記事は無断転載を禁じます)